

Title	赤木妙子君提出学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2000
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.69, No.3/4 (2000. 5) ,p.309(641)- 318(650)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20000500-0309

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

赤木妙子君提出学位請求論文審査要旨

論文題目 「海外出稼移民によるネットワークの形成と

展開—ペルー移民を素材として—」

論文審査の要旨

本論文は、戦前における福島県出身ペルー出稼移民者に焦点を当て、個人史研究の枠組みの中で、彼らのペルーでの生活と、人的ネットワーク形成のプロセスを、個別具体的な事例に基づき再構成したものである。特定の個人が海外の移住先でどのような原理に基づいた人的ネットワークを形成し、生活基盤を築いていったのか、またそれがどのように変質を遂げていったのかを、歴史的な方法に依拠しながら考察することを目的としている。

全体の構成と目的について簡単に触れた「まえがきにかえて」、全体の導入部となる序章に続き、個別事例を扱った7つの章、本論を議論する上で不可欠の基礎資料となった「ペルー契約移民データベース」構築について論じた補論からなり、「むすびにかえて」で今後の展望

を加えている。本論文の構成は、以下の通りである。

まえがきにかえて

—全体の構成と目的

序章 ペルー移民史における「契約移民」と福島県

出身移民

—統計からみたペルー移民

第一章 呼び寄せネットワークと県人意識の形成

—リマ在住福島県人の事例を通して

第二章 ペルー移民の人脈形成と職種

—福島県出身・高橋内橋の事例から

第三章 日系社会初期における共同経営の意味

—リマにおける日系カミセリア（シャツ製造販売業）を通して（その一）

製造販売業）を通して（その二）

第四章 ペルーにおけるカミセリアの広がりと呼び

寄せ移民

—リマにおける日系カミセリア（シャツ製造販売業）を通して（その二）

製造販売業）を通して（その二）

第五章 ペルーにおける日系洗染業の系譜

—人的ネットワークを中心に

第六章 日系社会における「写真師」の系譜

―白坂写真館の事例から

第七章 ペルー初期移住者の「転耕・転住・転航」

―海外移民の空間的移動と史料

補論 ペルー契約移民数をめぐる若干の問題

むすびにかえて

―今後の展開

先ず、本論文の構成に沿って、その要旨を記す。

序章、「ペルー移民史における『契約移民』と福島県出身移民」においては、ペルーへの「契約移民」送出に至る歴史を、日本からの出移民全体の流れの中に位置づけ、概説的に論じた後、本論文の〈素材〉となる福島県出身移民の位置を日本人ペルー移民史全体の中で確認する。外務省外交史料館架蔵の「旅券下付表」や「移民取扱人ヲ經由セル海外渡航者名簿」の悉皆調査によって作成した「契約移民」全員のデータベースに基づき、ペルーへの「契約移民」がハワイに代わる新たな移民送出先として、移民会社の積極的な働きかけを背景に展開していったことを統計の上から跡づけ、「契約移民」の送出過程、渡航船、出身県などについての分析を行なう。

ついで、女性移民、携帯児、そして「呼び寄せ移民」の基本的な性格についてまとめた上で、以下の論攷で個別具体的に分析される福島県出身移民が、西南日本出身者が多いペルー移民の中で如何なる位置を占めたかについて論じている。ペルーへの「契約移民」中、東北地方出身者は二一七二人で、全体の11%程に過ぎないが、そのうち、一九〇七年にペルーへ初渡航し、一九一五年に県人会を設立している福島県出身として記録されている移民は一五四四人で、東北出身者の7割以上を占めている事実を指摘する。これは県別「契約移民」数では、沖縄、熊本、広島について4番目である。しかも、福島県の内郡でも地域的な偏りが存在し、一般に「中通り」と呼ばれている旧福島県域に重なる、北部の伊達、信夫、安達の3郡に特に集中している事実を指摘することで、次章以下の個別事例の全体における位置づけを確認する。

個別具体的な議論は、第一章「呼び寄せネットワークと県人意識の形成―リマ在住福島県人の事例を通して―」から始められる。

第一章では、聴き取り調査から得られた現在の県人会活動や、日系二世、三世に見られる、県人会活動への参

加志向を、県人会と「県人意識」形成のプロセスに遡って分析する。史料の上では「県人」単位でしか見えてこない海外移民の行動が、実際には、同郷の血縁や隣人といった関係がペルーに持ち込まれた結果できあがった「ファミリーア」という単位のネットワークを基礎に実現されていったこと。また、ペルーで形成されていったそのネットワークが、ペルーという社会の中で、生活上のストラテジーとして利用されてゆくと同時に、再生産されつつ、ネットワーク自体の意味に変容が生まれ、多数の小「ファミリーア」の上位概念として、実体のない「県」が作られ、時とともに「県」が「ファミリーア」に代わり「実感」されていったとまとめる。このプロセスを、「契約移民」としてペルーに渡航し、その後リマの市街地における商業活動で「成功」をおさめた佐藤正由と佐藤八郎の2人の事例を用いて論じる。散在する史料を博搜し、巧みにつなぎ合わせ、聴き取りという手法を交えながら、彼ら2人の生活を再構成することによって、「県人」という意識が、所与のものとして存在したのではなく、より局地的な「ファミリーア」という単位の集合体として存在したものであることを論証する。「呼び寄せ」により発展していったペルー日系社会では、

郷里での地縁・血縁を基礎とした、生い立ちや生活に密着したネットワークが確立していたことを指摘し、それを上から覆う形で広がる上位のネットワークに、「県人」という名付けが行なわれたことを明らかにする。この「県人」としてのネットワークを通じて、フィクションとして作り上げられていったものが「県人意識」であるとする。また、「ファミリーア」の核となる人物と直接的な血縁関係を持たない「呼び寄せ移民」達が独立を果たしてゆく中で、「ファミリーア」という強靱なネットワークを積極的に利用するにせよ、逆にそこから抜け出そうとするにせよ、独立という行動を通じて「昇華」されたものとして「県人意識」が作り上げられていったとまとめる。このため、二世以降の世代になると、「ファミリーア」はほとんど実感されないものとなる一方で、新しく作り上げられた「県人意識」が実感されるという「逆転現象」が生じているとする。

第二章「ペルー移民の人脈形成と職種―福島県出身・高橋内橋の事例から」では、高橋内橋を軸とする集団の事例によって、ペルー上陸後の日本人移民が、移動、職業選択、就職といった生活の局面において、どのような「歴史的所産としてのネットワーク」を形成し、かつ利

用していったのかを、日本に残存する公文書や、「名簿」類を中心とする文献資料、写真資料、そして関係者への聞き取りをもとに、明らかにする。

日本から資本を持って渡秘した「自由移民」と、耕地労働で資金を得てリマへ出てきた旧「契約移民」の商業的成功によって、リマ日系社会の基礎が成立する。高橋内橋の理髪店が、資本を持たないまま耕地からリマに出てきた同郷の旧「契約移民」を雇用し、彼らの受け入れ先として機能していったことを、具体的な事例に基づき論証する。被雇用者が独立する際に、そこで得た技術、情報、ネットワークなどを活かそうとするため、必然的に同じ職種が選択されることになる。こういった同郷人の同業種店舗の再生産を通じて、「地縁」・「血縁」を結節原理として成立したネットワークが、次第に「職種」のネットワークへと、その意味を変化させてゆく。このことは、必然的に特定の職業と特定の「県人」との関係を広大させる結果となる。しかしその一方で、ネットワークの軸となる人物が、形成されて行く日系社会の中で新たな人脈を広げていくにつれ、それらのネットワークが自己完結的な関係に終わらず、より広範な広がりを持ち、社会上昇のステージとしての求心性をも兼ね

備えるようになり、具体的な交流の場を離れ他のネットワークと交差しつつ、機能し続けてゆくことになる。こういったネットワーク変容のプロセスを、硝子商の事例をもとに論証する。リマから遠く離れたアンデス高原の町ワンカヨや、更に戦後日本の進駐軍における事例をも追究し、これらのネットワークは次の世代にも引き継がれ、それが形成された時点での属性はほとんど忘れられ、ネットワークの存在自体も無自覚のものとなってしまっているにしても、依然として機能し続けて来たと結ぶ。

第三章「日系社会初期における共同経営の意味―リマにおける日系カミセリア（シャツ製造販売業）を通して（その一）」では、日本人カミセリアの先駆者・成功者として個別に語られている3人の事跡について、その店舗成立の経緯を様々な史料を駆使して再構成し、「伝記」類で個別の成功物語として語られているところとは異なり、彼らが「共同経営」という形でお互いに深い関係を持っていた事実を明らかにする。

成立初期のリマ日系社会においては、頼るべき同郷の先達移民は存在せず、開業・運転資金の不足を補うため、旧「契約移民」は出身地を異にする、あるいは同県人であってもペルー渡航以前には一面識もなかった「同航海

同耕地」の移民同士による「共同経営」という手段をとらざるを得なかった事実を指摘する。

しかし、やがて事業の伸展とともに、「共同経営」の必要性は薄れ、かつ、それぞれ自分の郷里から親族、知己を呼び寄せるようになってゆくに従って、初期の「共同経営」は発展的に解消されてゆき、後の伝記類ではそのような「初期型共同経営」が語られることはほとんどなく、子孫にもそれは積極的に伝えられていない事実を指摘する。成功物語において、かかる「共同経営」の事実が語られなくなるという事実を通じて、移民の精神構造を知ることができるとする。

第四章「ペルーにおけるカミセリアの広がりと呼び寄せ移民—リマにおける日系カミセリア（シャツ製造販売業）を通して（その二）」では、文献資料からは明らかにすることの困難な、「呼び寄せ移民」の独立のプロセスを、聴き取りを中心に、文献資料でそれを補強しつつ再構成する作業を通じて、そこに作用していたネットワークを析出することを試みている。

初期の「契約移民」の独立のプロセスで作用した、「同航海同耕地」という「意識」に代わり、都市部に呼び寄せられた移民にとって、呼び寄せ主体である「成功

者」の「地縁・血縁」という原理がネットワーク形成に重要な役割を果たしたことは無論であるが、耕地を経由せず、直接都市部に集住することになった「呼び寄せ移民」の場合には、「同航海」という意識が日常的に強化される機会が多く、ネットワーク形成に強く作用している事実を、シャツ製造販売業を生業として独立していった「呼び寄せ移民」達の日常生活を再現することで描き出している。

また、彼らの日常生活を緻密に再構成することで、シャツ製造業の技術の修得、独立、(写真)結婚といった「呼び寄せ移民」の生活のステージで作用してゆくネットワークを描き出すとともに、これまでほとんど明らかになることのなかった、女性移民の占めた位置と役割とを析出してゆく。

第五章「ペルーにおける日系洗染業の系譜—人的ネットワークを中心に」においては、主に文献資料に基づき、リマで展開された日本人の洗染業の事例を可能な限り収集し、それぞれの経営、雇用・徒弟関係、店舗の譲渡といったプロセスを丹念に再構成することを通じて、それぞれの局面で作用していたネットワークを別出する。

初期日系社会では、後に見られるようになる「県人の

「枠」を越えた雇用関係や店舗の譲渡、「共同経営」といった形態が多く見られるが、次第に、呼び寄せに基づく兄弟親族間でのそれに変化していった事実を指摘する。これは、「呼び寄せ移民」の時代となったことで、日系社会自体の規模が拡大し、経営者が創造的、選択的に人的ネットワークを利用できるようになったためであると、このことが、初期日系社会内に張り巡らされていたネットワークに、「県人」という結節点がはめ込まれてゆくプロセスであると結論づける。しかし、初期に作られた移民ならではの、「県」の枠を越えたネットワークも否定されたわけではなく、経営者同士の横のつながりとして、各種同業組合や日系人団体という形をとってそれが活かされていったとする。

第六章「日系社会における「写真師」の系譜——白坂写真館の事例から」では、ペルーにおける日本人写真師の系譜を、主に文献資料に基づいて再構成し、写真館の設立や写真技術の修得、及びその伝承がどのようなネットワークを通じて行なわれていったのかを具体的に明らかにすることを通じて、写真や写真館の持つ意味が変化していったことを論じる。

先ず、外交史料館の一次資料の博搜から、ペルー渡航

以前に別の地への海外渡航を経験していた移民が多数含まれていた事実を指摘する。その中から、福島県出身移民が全体の7割を占めたマカテア島移住の体験者である、白坂寅作と大内松蔵を取り上げ、鉦山労働者として出稼ぎに出た彼らが、写真術を修得して帰国し、農業出稼ぎ移民としてペルーへ渡航後は、都市部に入り写真師として活躍することになった事実を明らかにする。また、戦前の日系社会で写真師として活躍した人物も、一時帰国して技術を修得した上で再渡航し、ペルーで写真師として活動したことを確認し、その技術伝承の過程で形成されたネットワークは、写真技術そのものの一般化により、現像取り次ぎを商売とする「写真屋」における商取引のネットワークに置き換えられ、消滅していったように見える。しかし、初期移民にとって「写真」が果たしていた役割の一部は、現在では、エスニック・メディアたる日系新聞が代替し、「写真師」の系譜は職種を変えて日系新聞の「新聞記者」として生き延びている事実を指摘する。

第七章「ペルー初期移住者の『転耕・転住・転航』——海外移民の空間的移動と史料」では、外務省記録の中から、海外渡航者についての「行方不明者取調」や「送金

説論」・「帰国説論」などについての申請書類をもとに、渡航以後、郷里との音信が不通になったペルー移民の捜索に関する史料を通して、ペルー初期移民の国境を越えた移動の様子を具体的に再構成し、そこに働いていたネットワークの存在を描き出そうとしたものである。

ペルーへ渡航した移民達の中には、配耕先の耕地からリマなどの都市部への移動という大きな流れの他に、国内各地への移動、周辺のラテンアメリカ諸国をはじめ、北米やオーストラリア、はてはヨーロッパに迄も国境を越えて移動した「転航」者が存在したことを、巧みな史料操作により浮かび上がらせる。それと同時に、そういった移動の背景に、先行移民によって作られていったネットワークや、在外の日本人移民を斡旋する会社や人物の存在を確認している。

国別に描かれてきた従来の移民史の枠外の存在であるために、これまでほとんど描かれることがなかった、「移動してゆく移民」達の存在を丹念に探索してゆくことは、従来の移民史の全体像に肉付けするばかりでなく、移民史に描写された「移民像」のもつ、「歴史性」をも照射することになると指摘する。更には、「私的」な問題の解決が公的な機関に委ねられ、外務省が在外公館と

連絡を取りつつ、「公的」に国民の依頼に応えた史料は、近代国家形成期の国家と国民との関係をも浮かび上がらせるものであるとする。

補論「ペルー契約移民数をめぐる若干の問題」では、各移民会社が外務省に提出したペルー移民「渡航者名簿」、及び「旅券下付表」「海外渡航認可」、さらには、リマの日本人ペルー移民記念史料館架蔵の現地移民会社支店の記録に基づいた「上陸者名簿」など現在収集可能な史料を博搜し、それぞれに厳密な史料批判を加えた上で、ペルーへの「契約移民」全員についての正確なデータベース作成作業を行なった結果をまとめている。

その作業を通じて、単に正確な移民数や出身地の把握といったことにとどまらず、移民会社の経営・事務の実態や、様々な二次三次史料のできあがる経緯が的確に再現されている。

「むすびにかえて」では、各章で扱われた個別事例の再構成により剔出されてきた様々なネットワークをもとに、「リマ日系社会の『雇用―被雇用』関係模式図」を作成して、移民ネットワークの全体像を提示し、更には国境を越えた関係性の追究が必要であることを指摘する。

以上、各章で取り扱われている内容を簡単に概観したが、本論文で論じられている内容は次のようにまとめられる。

初期「契約移民」の時代においては、同航海・同耕地といった共通の経験が、ネットワーク形成の原理となる。これは、先行する日系社会の存在しない時点における「共同経営」という形で、職業上に浮かび上がってくる。しかし、日系社会の成長と拡大にともない、「呼び寄せ移民」が加わってくると、そこでは「地縁」・「血縁」の原理が、ネットワーク形成により大きな意味を持つようになる。また、同じ「呼び寄せ移民」であっても、経営の中心にいる呼び寄せ者と直接間接に血縁関係を持たない者の多くは、それまでに蓄積されたネットワークをもとに、独立を果たした後に故郷から妻を迎えることになる。このことで、「県人意識」の形成と強化、及び同業種の店舗の再生産が行なわれていくことになる。この「県人意識」と、それに基づいて形成されていったネットワークは、移民が呼び寄せられた時に機能していたネットワークへの依存を更に深めるにせよ、逆にそこからの離脱をはかるにせよ、そのどちらにも有効に機能しうるものであった。もつとも、初期の移住者時代に「共

同経営」、雇用関係などを通じて形成されていったネットワークは、「県人意識」やそれに基づき再生産されるネットワークに覆われて、表面的には姿を消し、成功物語からも洩れていくが、同業組合におけるネットワークなどの形をとって、存続し続けていく。呼び寄せにより不断の再生産を続けた「県人意識」もまた、世代交代により、その意味を変えていく。日本への出稼ぎなどの影響が、「県」への回帰をもたらしているが、それは一世の時代に形成されたものとは全く違ったものとなっている。

このように本論文では、移民生活の様々な局面において、移住者自身の位置と、その置かれた社会経済的な位置の相互関係を背景に、形成、再生産され、変質していく多様なネットワークを、具体的な個人個人の生活の再構成を通じて別出している。

本論文は、歴史的な手続きに忠実に従い、巧みな史料操作により、個別具体的なペルソナ移住者とその生活史を、職業という切り口を用いて再構成してゆく作業を積み重ねることで、平板な移民像を越えた、生きた移民像を描くことに成功している。しかも、各章で扱われる個

別事例の検証が、単にそれぞれの個別事例の確認、列挙にとどまることなく、具体例を基に、きわめて奥行きのある問題意識に基づいた、移民のカテゴリー化を試み、そこに作用した様々なネットワークを、その成立の原理、プロセス、そして変容までを視野に入れながら、丹念に追究した労作であると評価できる。

本論文を通じて第一に感じられるのは、歴史学的な方法に従った徹底した原史料・文献資料の博搜と巧みな史料操作である。内外に散在する原史料、文献資料は言うまでもなく、現地調査により写真資料、口述資料のみならず、広告、新聞記事といった片々たる資料をも見逃さず収集して読み込む研究態度は、歴史研究者としての著者の優れた資質を示すものである。

ネットワークをキーワードとして、ペルーへ移住した福島県人を素材に、移民の移動のダイナミズムを時間空間を限定せずに徹底的に追究し、脈絡なく散在する各種の資料を発掘し、巧みに一編のストーリーにまとめる力量は高く評価できる。政治史や事件史を視野に捉えながら、市井に生きる個人の生活の中から資料を発掘するのは決して容易なことではないが、ここでは現地ペルーで集めた口述資料を含む各種の資料を検証することによつ

てその難問を克服している。ネットワークによって呼び寄せられた新しい移民や妻となった女性の「呼び寄せ移民」が、ペルーにおける日本人社会の中で逞しく適応していく過程の検証は、これまでほとんど議論されることになかった。

歴史研究者である著者が、わが国の中南米移民研究に史学的研究手法をふまえた研究成果を提示したことも特筆せねばならない。残念ながら、従来の研究には厳密な資料批判と検証をおろそかにする傾向があったことは否めないからである。

データベース作成による検証という新しい研究手法を取り入れ、先行研究の成果の学問的利用価値を高めたことも評価に値する。「補論」で展開しているペルー移住者人口統計の検証は緻密であり、この新しい研究手段を活用することによって、日本人の海外移住、及びペルー移民の概要とその特長が統計的に整理され、視覚的にまとめられている。

ところで本論文では、福島県出身者を素材として移民がどのような仲間を作り、家族や親族をペルーに呼び寄せ、どのように妻を娶り、生活基盤を作ったのかが、著

者が資料発掘過程で着目し取り上げた素材である移民の人生を丹念に追うことによって復元されている。個人の手腕のみに成否がかかっていた第二次世界大戦以前の移民が、如何に人的ネットワークの内容を時代と環境の変化に即して変えていったか、その経緯が明らかにされている。しかしここで欠落しているのは、人的ネットワークがホスト社会との関係でどのように形成されたのかという視点である。なぜなら言語による意思疎通の困難という障害が存在したとはいえ、受け入れ社会の中で何らかのネットワーク形成が必要であったと考えられるからである。この観点からすると、本論文が追究した個人史の再構築を通じて移民社会の形成と確立の過程を明らかにするためには、日本側の史資料のみに依存して検証する方法では限界があると言わざるを得ない。本論文の中でも日本人仲間の不誠実さや日本人以外の人々との関わりに触れてはいるが、移民が異文化社会で生き延びるために、ペルー社会での生活の積み重ねの中で如何なるネットワークを形成したかを解明することは、本研究を一層実り豊かなものにするであろう。

以上のように検討してきた結果、本研究は各種資料を

博搜してそれを巧みに操作する確かな歴史研究方法に立脚しつつ、斬新な視角からペルー移民史を解明した卓越した業績であり、中南米移民史研究の発展に資するところ大きいと確信する。よって審査員一同は、本研究の著者赤木妙子君が博士（史学）の学位を授与されるに充分値すると判定する。

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授 文学博士 高瀬弘一郎
副査 慶應義塾大学文学部教授 柳田 利夫
副査 中央大学文学部教授 Ph. D. in History 国本 伊代